Ｈ１６年度「学部と附属学校園の共同研究」プロジェクト
～研究主題Ａ「４附属学校園の一環教育の研究」　「家庭科」共同研究の成果～

長崎大学教育学部　赤崎　眞弓
長崎大学教育学部附属小学校　鳥山　礼子
長崎大学教育学部附属中学校　荒木　成子
長崎大学教育学部附属養護学校　松下　幸美
長崎大学教育学部附属養護学校　佐藤　絵理
長崎大学教育学部附属幼稚園　深堀　由比

１．研究活動について

（１）はじめに

学部と附属学校園との共同研究の３年目である平成１６年度は、家庭科や子どもの生活に興味をもつ教育学部の赤崎眞弓、附属小学校の鳥山礼子、附属中学校の荒木成子、附属養護学校の松下幸美と佐藤絵理、附属幼稚園の深堀由比の６名の教員で、「４附属学校園の一環教育の研究」プロジェクトの中の一研究会として「家庭科」に関する研究会を立ち上げ、活動を開始した。

研究会は１ヶ月に１回開催することとし、平成１６年度は次の通り７回開催された。

開　催　日　時	
第１回研究会	平成１６年　９月１４日（火曜日）18:00 ～ 20:00
第２回研究会	平成１６年１０月　５日（火曜日）18:00 ～ 21:00
第３回研究会	平成１６年１１月　９日（火曜日）18:00 ～ 21:00
第４回研究会	平成１６年１２月２０日（月曜日）18:00 ～ 21:00
第５回研究会	平成１７年　１月１８日（火曜日）18:00 ～ 20:30:
第６回研究会	平成１７年　２月２２日（火曜日）18:00 ～ 20:00
第７回研究会	平成１７年　３月　４日（土曜日）18:00 ～ 21:00

（２）活動内容

１）第１回研究会

平成１４年度から開始した「学部と附属学校園の共同研究」プロジェクトについて、平成１４年度および１５年度の研究成果である「平成１４年度　長崎大学教育学部　学部と附属学校園との共同研究プロジェクト報告書」と「平成１５年度　長崎大学教育学部　学部と附属学校園との共同研究プロジェクト報告書」を用いて、その流れとこれまでの成果について説明した。

本研究会では、それぞれの附属学校園において大切にしていることや授業内容、児童・生徒の実態などについて情報を提供しあい、話し合うことによって、情報を共有したり、授業や子どもたちとの関わりについてよりよい方向性を見いだすことを目的とすることになった。大切なこととしてでてきたキーワードは、もの作りの楽しさ、豊かな生活、生活を楽しむ、生活の中の基本動作、技能、人や物との関わり、であった。

２）第２回研究会

共同研究の課題を決定するために、それぞれの立場で「できそうなこと」、「やってみたいこと」について話し合いを行った。

３）第３回研究会～第７回研究会

本研究における話し合いの内容やわれわれの気持ちを保護者の方々にも知っていただきたい、またこれらの内容はきっと役に立つことがらに違いないということになり、その内容を「家庭科だより」という形で発信することになった。通常は附属学校園といえどもそれぞれの学校園内のみで発行されるが、この「家庭科だより」は園児から小学生、中学生、大学生と成長していく子どものことを一緒に考えてもらうために、各附属学校園が発行した「家庭科だより」を学部と各附属学校園で掲示し、保護者、園児、児童、生徒、大学生、教員に見ていただき、家庭科に興味・関心を持っていただくこととした。また、それぞれの担当者が発行するので、号数をつけず、発行年月日を書くことになった。

４）「家庭科だより」発行

話し合った内容に関連する各附属学校園の授業風景や取り組みとともに、その事に関する考え方やキーワード等を紹介することとした。

各附属学校園の「家庭科だより」の発行日は次の通りであり、各学校園別に紹介する。

○附属小学校　　平成１７年２月８日号
○附属中学校　　平成１７年３月２日号
○附属養護学校　平成１７年２月１４日号、平成１７年２月２２日号
○附属幼稚園　　平成１７年３月７日号

５）おわりに

毎月１回、授業終了後約３時間ほど「家庭科」や子どもの生活に関連して熱心に意見交換でき、情報を共有・発信できた意義深い共同研究であった。　（教育学部　赤崎眞弓）

2．「家庭科だより」を発行して

附属小学校　鳥山礼子

将来，よりよい生活を創り出していくための力を，子供たちが身に付けていくことが家庭科のよさであると信じながら日々の実践を行っています。しかし，家庭科について知っていただく機会がもてず，学校での学びがなかなか暮らしに結びついていかない難しさを感じているところです。

このような現実を踏まえ，家庭科と家庭が互いに連携するためには，「家庭科がもっているよさをもっと PR しましょう。」また，「家庭科に携わる教員が，お互いの学校園の様子を知り，抱えている悩みを相談したり，情報交換をしたりしましょう。」ということから始まった共同研究でした。

家庭科のよさを知ってもらうための方法の一つとして，の発行に取り組んできました。この共同研究を通して，小学校での学びがどのように中学校につながっていくのか，幼稚園での生活がどのように小学校の暮らしにつながるのかを知ることができました。また，養護学校の学びが暮らしに深くかかわっていることも知り，自身の家庭科に対する考え方を深めることにつながりました。

「家庭科だより」は，保護者に家庭科学習の内容や担当教師の思いを知っていただくだけではなく，学部の赤﨑先生からも関連した内容の記事を寄せていただくことで，より確かなものへとなってきました。

家庭科のおかげで，台所に立って料理を手伝う機会が増えました。「今日の御飯はなに？」と鍋のふたを開けにきたりもするようになりました。生きていくための力となるきっかけを与えていただきました。

食べるだけではなく，料理する，片付けるまでできる・・・そんな大人になってほしいと願っています。

「家庭科だより」を通して，学校での学習内容が分かるようになり，子供の頑張りをほめたり，認めたりできるようになりました。

これは，家庭科学習について寄せられた保護者の感想の一部分です。「家庭科だより」の発行を通して，学校で取り組んでいる内容や，教師の思いや願い，学習の意図などが伝わり，家庭での子供の取り組みについて，教師の願いに沿った協力や言葉掛けをしていただけるようになってきました。学校と家庭の連携がうまくいくと，子供たちから「またやってみたい。」「今度は，○○をやってみたい。」などの報告が聞かれるようになってきました。

今年度の取組は，学校での学習内容の紹介や教師の思いを語ることなどが「家庭科だより」の中心でしたが，次年度は保護者や地域方々からの感想や意見も取り入れて，子供たちを取り巻く人々が，家庭科について考えを出し合えるものになれるようにしていきたいと考えています。

学部と4附属学校園の共同研究

家庭科だより

平成１７年２月８日
長崎大学教育学部附属小学校
担当　　鳥山礼子

学部と附属学校園による共同研究の結果報告「家庭科だより」を発行いたします。

平成１６年９月に，附属小学校の鳥山礼子，附属中学校の荒木成子，附属養護学校の松下幸美と佐藤絵理，附属幼稚園の深堀由比，そして教育学部の赤崎眞弓の六人で「家庭科」についての研究会を発足いたしました。

学部と附属学校園の共同研究は，平成１４年度に開始しました。平成１５年度には，「算数・数学」に関する授業研究が始められ，それぞれの学校園における授業参観と研究協議を行い，それぞれの年度で報告書を作成しました。

今年度は，「家庭科」も共同研究を立ち上げ，家庭科や家庭科につながる子供を取り巻く諸問題について，それぞれの立場から情報を提供し合い，子供たちの健やかな成長を願って取り組んでまいりました。その話し合いの中で，私たちの話し合った内容を保護者の皆様にも知っていただきたく，「家庭科だより」という形で発信することになりました。「家庭科だより」は学校段階にこだわらず，四つの附属学校園及び教育学部にかかわっておられる皆様に読んでいただきたいと考えております。そして，園児から小学生や中学生，高校生，大学生へと成長されるお子様のことを，私どもと一緒に考え，見守り，働き掛けていただきたいと思っております。今後，各学校園から発行されます「家庭科だより」を御期待ください。（赤崎眞弓）

附属小学校からこんにちは！

小学校の第五学年から家庭科の学習が始まります。子供たちは，ド学年のころから「早く家庭科をしたい。」「お姉ちゃんが，家庭科でクッションを作ったよ。」「六年生が料理をしていたよ。」など高学年になると実施される家庭科学習に期待をふくらませています。

家庭科は，衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して，家庭生活への関心を高めるとともに日常生活に必要な基礎的な知識と技能を身に付け，家族の一員として生活を工夫しようとする実践的な態度を育てることを目標にしています。つまり，家庭科で学習したことを実際の家庭や地域の人々との暮らしの中で生かすことが大切になってきます。そこで，家庭科の学習においては，子供たちが確かな知識と技能を身に付け，自信をもって家庭での実践に臨むことができるようにしていきたいと考えています。御家庭におかれましては，子供の実践を励まし認めていただければ幸いです。

6年生の学習

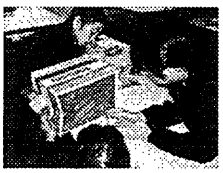
卒業まであと一か月。小学校生活を振り返ると，家族や多くの先生方のお世話になりました。これまで家庭科の学習で身に付けた力を生かして，感謝の気持ちを表す計画を立てています。調理をしたり，小物を作ったり，掃除をしたりと感謝の気持ちを表す方法は様々です。

小物作りの様子

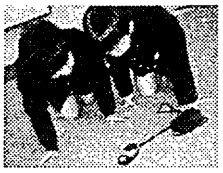
調理の様子

5年生の学習

寒い冬を暖かく暮らしたい！季節に応じた暮らし方を考えています。健康を考えた暖房のこと。暖かい着方のこと。日光を取り入れる工夫のこと。さらにもう一つ，家族に暖まってもらうための作戦を展開しています。お楽しみに！



換気実験の様子



明るさ調べの様子

3．附属中学校と家庭科だより　－共同研究を通して－

平成16年９月14日に第１回目の家庭科の共同研究会が開催され，４附属学校園を代表する教師が，この機会にはじめて一堂に会した。養護学校・幼稚園・小学校・中学校の連携を図る最高の機会である。家庭科の学習は，学校教育目標に掲げられている「生きる力」そのものを育成する教科であり，将来に向けて生活の自立を目指し，生涯教育の視点で，現在及び将来にわたって貫かれるものである。それを考えると，附属学校園の特性を活かした養・幼・小・中，それぞれの学校による連携は大変重要なものとなる。

今回は，４附属による家庭科だよりの作成を通して，貴重な情報交換を行うことができた。特に，附属養護学校や幼稚園からの情報提供は大いに参考になり，今後に向けての課題を見出すことにもつながった。障害を持つ人々との共生が叫ばれて久しいが，この機会にはじめてその実状に触れたような気がする。障害の種類や特徴を理解し，障害者と健常者相互の思いを知ることが，互いに助け合い協力し合うことの出発点となる。そこから，各学校における交流の在り方や方法が見えて来ると感じた。達成の度合いは異なるにしても生活の自立を目指すことには変わりはない。社会で自然に合流できるよう，今の時点から手に手を携える教育を行っていくことが必要である。今回の共同研究で，教師がまず養護学校の様子を知り，家庭科だよりを通して保護者もまた，障害を持つ児童・生徒の生活を知る糸口ができたことは大きな成果であったといえる。

幼稚園の段階においては，保護者の考えや態度が幼児の心身の発達に直接影響を与える。価値観が多様化する現在，家庭における教育の本質が見失われがちである。家庭科だよりを通して，保護者に幼稚園の様子を知らせる中で，子育ての指針を示したり，示唆を与えたりすることは，将来，社会人として自立した一人の人間を育てるために大変参考になり有効であると感じた。

また，小・中・高の連携が問われる中，これまで最も身近であるはずの附属小学校との連携が十分に図られていなかった。教師の思いと共に，児童の学習の様子や今後の学習予定が家庭科だよりの中で述べられており，小学校の学習状況を垣間見ることができた。小学校家庭科の学習内容を十分に理解し，児童の実状を知った上で中学校におけるカリキュラムの検討や題材の精選を行うことは，学習指導上，大変有効であると考える。今後，家庭科だよりを軸にしながら，研究内容を小・中の連携，更には高等学校との連携へと発展させることが望まれる。

附属中学校３年生の授業は「家族と家庭生活」を中心に保育に関わる授業を行ってきた。そこで実施した保育体験の様子を生徒の意識調査を交えながら家庭科だよりに掲載した。保育体験の前と後では幼児に対する生徒達の意識が大きく変化している。生活環境との関わりが深いため保護者へ生徒の実態を知らせることは，大変，意義あるものと感じた。

今回の共同研究は，学部と４附属による情報交換を行う中で，各学校の状況を把握したり，家庭科だよりを通して保護者に学校における取り組みを知ってもらったりする２つの成果があった。家庭科だよりについては，掲示板に貼付することで各学校の職員・生徒，保護者に読んでもらったが，今後，各家庭に配布することで更に多くの人々に４附属の取り組みを伝達し，家庭科の取り組みを理解してもらうことも必要である。また，教師間の研修を行い，互いの資質を磨いていくことも重要であろう。今回，大変貴重な共同研究に参加させて頂き，諸先生方と交流を持てたことことに心から感謝している。（荒木成子）

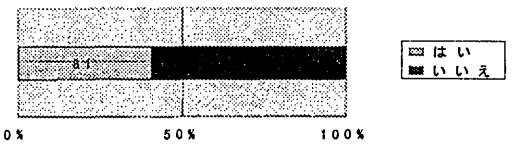
学部と４附属学校園の共同研究

家庭科だより

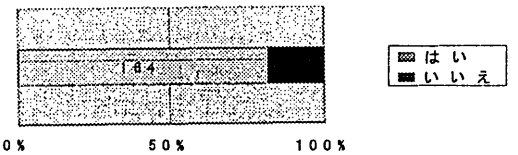
平成１７年２月　日
長崎大学教育学部附属中学校
担　当　　荒木成子

附属中学校３学年の授業は「家族と家庭生活」を中心に保育に関わる学習を行ってきました。自分たちの成長を振り返りながら，幼児の心や情緒の発達・社会性の発達・ことばや基本的な生活習慣の習得について学び，昨年の11月には，附属幼稚園で保育の体験学習を行いました。昨年，一昨年と幼児や児童に関わる悲しい事件が，わたしたちの身の回りで起こっています。家族の絆や社会の一員としての自分の在り方を，家庭科の授業を通して，今一度，見つめ直してみる機会にしました。３年生200名の保育体験学習前と後の意識調査や感想を基に学習の様子の一部をご紹介致します。

身近に幼児と接する機会がある



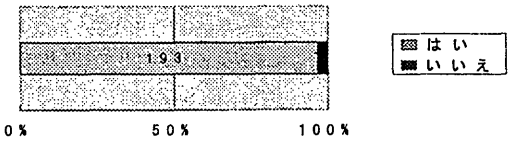
子どもが好きである



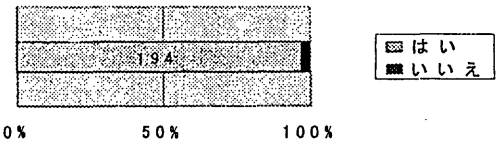
残念ながら，ひと昔前のように子ども達が群れて遊ぶという環境は激減しているようで，約60％の生徒達は，幼い子供と接する機会がないと答えています。また，子どもが好きではない答えた生徒は約20％，５人に１人の割合です。理由は，１「興味がない」２「接し方が分からない」３「わがままだから」４「すぐに泣くから」の順で，半数以上は１と２が占めており，そのほとんどが幼い子供と接する機会がないと答えた生徒達でした。しかし，保育体験に興味があると92％の生徒が答え，前向きな姿勢が感じられました。

保育体験後の結果を見てみましょう。

子どもに関心が持てるようになった



子どものかわいさを発見することができた



ほとんどの生徒が子どもに関心を持ち，かわいいと感じています。「体験に勝るものなし」とはよくいったもので，子どもが嫌いになったと答えた生徒は一人もおりませんでした。生徒達の感想をご紹介致します。

- 保育体験は，前から楽しみでした。子ども達の笑顔を見ていると，自分まで笑顔になって嬉しかったです。
- テスト前でイライラしていたが，園児達と触れ合って朗らかな気持ちになれた。子どもは人を和ませる不思議な力があると感じた。
- 子どもと触れ合うのが苦手だった。でも，行ってみると子ども達が手を引いてくれて，僕自身びっくりするくらい自然に小さな子と触れ合うことができた。
- 少々わがままでも，あの愛らしい笑顔には負けてしまいました。
- 親戚の中に私より年下がいなくて「お姉ちゃん」なんて呼ばれたことがなかったので，くすぐったいような嬉しい気持ちになりました。
- 「すぐに泣いてわがままだ。」という印象しかなかったけれど，まずかわいいという思いが強くなりました。もし体験していなかったら考えは変わらず，良さを見つけることができなかったと思います。
- 自分たちも幼児期には，，同じように愛情をたっぷりかけられて育ってきたんだということに気付いた。
- これから先しばらくはあんな小さい子どもと接することはかなり少なくなると思う。今の時期に触れ合えてよかった。確実に成長した自分に気付くことができた。
- 頭を低くして目線を同じにしないといけないと聞いて，注意をして話そうと思ったけど，後から考えてみると自然に頭を下げて目線を同じにしてしゃべっていた。
- 自らを振り返り，記憶から忘れかけていたものを再び呼び覚ますことができたので有意義な体験だった。

人は生まれただけでは人間にはなれません。人との関わりを経験してはじめて人間として成長します。今回の体験学習の成果に表れているように、幼児に関わってみないと幼児の存在にきづきません。関わってみてはじめて幼児のことがわかってきます。頼り頼られるといった基本的な人間関係の大切さを実感させてくれる存在である幼児に関わったこの機会をきっかけにして、多くの年齢の異なる人と関わる体験をしてほしいと思います。また、人と関わることが好きな人に成長してほしいと思います。

（教育学部　赤崎眞弓）

4．学部と附属学校・園の共同研究「家庭科部会」で学んだこと

長崎大学教育学部附属養護学校　小学部　松下　幸美

(1)　はじめに

私が家庭科部会に参加したいと思ったのは，本校の小学部で日々繰り返し取り組んでいる日常生活の指導の内容を，家庭科という教科が一番取り扱っていると考えたからである。そして，子どもたちが毎日，「できるようになりたい」と頑張っている姿の延長上に，将来の自立した生活・豊かな生活があることを考えたとき，「豊かな生活」という視点に一番近い教科が家庭科ではないかと思ったからである。本稿では，この家庭科部会での協議をとおして学んだことについて，三つの視点からまとめてみたい。

(2)　生きる力を育てる家庭科

家庭科で取り扱う内容は，大きくとらえると衣・食・住・家庭生活である。まさしく子どもたちの生活そのものである。子どもたちが幸せに生きることは豊かな生活をおくることであり，そのために必要となるのが生きる力である。教師は，「・・・ができる」力=技能の習得をねらって授業を考え，つくっていく。生きていくうえで，技能は必要である。しかし大切なのは，何のための技能であるかということであろう。子どもたちが「私も作ってみたい」という意欲をもつことや，作られた背景が分かって「大事に使わないといけない」という気持ちをもつことができることが大切なのである。そういう子どもたちの内面の育ちが伴う技能は，生活を豊かにする力になると考える。

(3)　家庭との連携を大切にした家庭科

子どもたちの日常生活の様子を見てみると，低体温児の問題や食生活の乱れ，道具や自分の体をうまく使いこなせないなどの課題がある。これらのことについては，学校だけの取り組みでは難しさを感じる。保護者はややもすると，いわゆる教科の勉強ができればそれで十分ではないかと考えるところがある。箸の使い方が不自然でも，「食べることができればそれでいい」という考え方であれば，いつまでたってもきれいな箸使いはできるようにならない。箸を美しく使えることは，日本人としての文化を伝えることである。そういう視点に立って毎日の生活を見直してみることも必要である。「どんな人間に育ってほしいのか」，「・・・ができることがどんな意味をもつのか」ということについて，家庭とともに考え，家庭でできることについては家庭で取り組んでもらえる連携をしていかなければならない。

(4)　家庭科通信をとおして知った附属学校・園の子どもたち

家庭科通信をとおして，養護学校の学習や子どもたちの取り組みの様子を発信できたことは，啓発活動として意義があっただけでなく，私自身にとって，豊かな生活という視点で日々の授業を振り返るよい機会でもあった。しかし，それ以上に，他の附属学校・園の取り組みの様子を知ることができたことは，大きな喜びであった。幼稚園の子どもたちの育ちを知ることで，童心を大事に育てていくことの大切さと，技能の獲得にあたっては，子どもたちの気持ちを大切にしながらきめ細かくかかわられている教師の姿に感動した。小学校や中学校の子どもたちの姿から，学びたがっている子どもたちに教師がどのようにかかわっていくかで，家庭生活への般化が図れるということに気づかされた。

(5)　おわりに

今年度の共同研究「家庭科部会」で得た最大の収穫は，「本当の味を知る」ということばに集約されるであろう。本当の豊かさとは，ただ食べればよいという考え方ではなく，美しく食べることが大切なのだということを知って，実際にできることである。市販のレトルト食品や冷凍食品を利用することがあってもかまわないが，それに味を慣らされてしまうのではなく，素材がもつ本来の味を生かしたおいしさを伝えていくことが大切なのである。便利なものに流されず，本当のものがもつよさを子どもたちに伝えていくことが，私たち教師の役割であると思う。

家庭科だより

平成17年2月14日
長崎大学教育学部附属養護学校
担　　当　　松　下　幸　美

附属養護学校では，こんな勉強をしています。

附属養護学校には，小学部・中学部・高等部があります。6歳の小学生から18歳の高校生までが，同じ校舎の中で学んでいます。ところで，養護学校の時間割を見ると，小学校や中学校の時間割にないものがあります。小学部の「日常生活の指導」や「課題あそび」などは，「どんな勉強なのかな?」と思われるかもしれません。中学部や高等部にも生活Ⅰや農耕，生産(陶芸)など，見慣れないものが並んでいます。そんな風に名前が違っているから，小学校や中学校と全く違うことをしているのかというと，そうではありません。

小学校や中学校には，「家庭科」の時間がありますね。「家庭科」は，衣・食・住などについて学習する教科ですが，養護学校の小学部では，「日常生活の指導」という時間に勉強しています。「衣」に関することで言えば，着替えの仕方やその片付けの仕方などについて勉強しています。中学部では，「家庭科」という時間があります。洗濯や調理，簡単な裁縫の学習をします。高等部では，生活Ⅱという時間に，家庭工作や調理，刺し子やミシンに取り組みます。養護学校では，普段の生活の中で実際に使えることを大事にして学習しています。それが，**自分がより自分らしく豊かに生きる**ことにつながると考えるからです。

例えば，着替えですが，自分で自分の好きなものを選んで着ることができる子どもになってほしいと私たちは願っています。そのためには，基本的な衣服の着脱が自分でできるようになってほしい。どんな服をどんなときに着たらいいのか考えて選ぶことができるようになってほしい。自分でできないときには，「手伝ってください」とか「教えてください」と言えるようになってほしい。・・・・・・

養護学校の子どもたちは，自分でできることは自分でしたいし，できるようになりたいと思っています。ですから，着替えの学習では，ボタンをはめたりはずしたりすることや，裏返しにならないように脱ぐこと，脱いだものを散らかさないで着替えること，パンツ一枚にならないで着替えることを小学部の1年生からやっています。指先がまだうまく使えない子どもには，家庭で，大きめのボタンとボタンホールにしてもらいます。パンツ一枚にならないで着替えることや脱いだものを散らかさないことなどは，将来，会社等で着替える時のマナーやエチケットに関わってきますので，小学部1年生の時からよいやり方や順番を教えて，毎日の着替えのなかで，自分でよりよくできるように指導しています。そして学校でやっているのと同じように家庭でも取り組んでもらっています。

たかが着替えですが，されど着替えなのです。自分で着替えをすることで，自分のからだを意識し，自分の手足をどのように使えばいいのか学びます。自分に似合う服を選んだり買ったりする楽しさを知ります。そして，自分に似合う服を着て出かける学習につながります。このように，自分でできることを増やし，社会の中でより豊かに生きる力を育んでいるのです。

このように「衣」に関することだけでなく，「食」や「住」に関することも，人が人として自分らしく豊かに生きるために大切なことという視点から，養護学校では勉強しています。

まさしく家庭科がねらっている学びの原点が養護学校の学習の中にあると思います。根気よく繰り返し行動することで，集中力や忍耐力も鍛えられます。

現在，教育学部教員養成課程に在籍する全学生が，附属養護学校に2日間うかがい，授業参観と環境整備を行っています。初めて養護学校を訪れる者がほとんどですが，子どもたちに魅せられて頻繁に通うようになる学生もいます。また，環境整備の重要性を知り，常に整備しておくことの大変さを実感して大学に戻ってきます。

最後に実習を終えた学生の感想を抜粋します。『私は中庭にある遊具の錆び止めを塗る作業とシーソーにペンキを塗る作業を担当した。始めはなぜこの実習に環境整備活動が組み込まれているのだろうと思った。外は寒く，ほとんどやる気がしなかったが，作業を始めると本当に一生懸命作業してしまった。私たちが環境整備を行うことで，子どもたちが安全に楽しく遊べるのだと気づいたからである。』実習を契機に養護学校の児童生徒の皆さんと学部学生との交流が深まることを期待しています。　(教育学部　赤崎　眞弓)

家庭科だより

平成17年2月22日
長崎大学教育学部附属養護学校
担　当：佐藤絵理，松下幸美

附属養護学校では，こんな勉強をしています。~その2(高等部の学習から)~

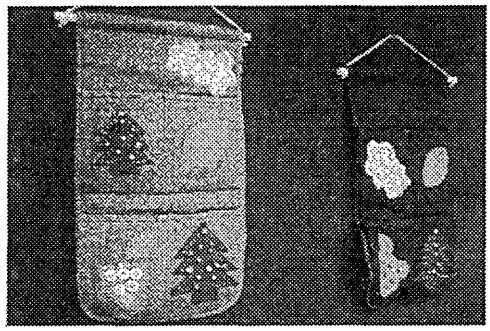
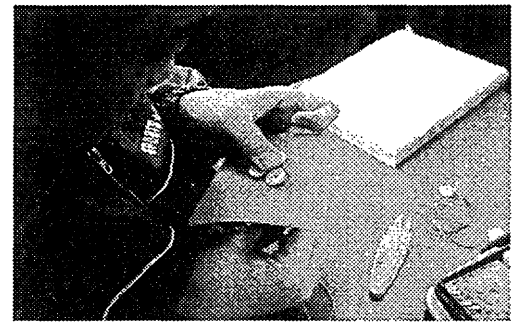
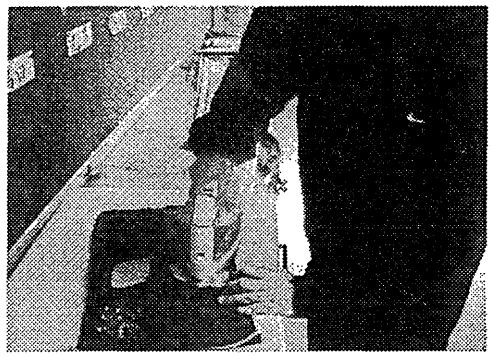
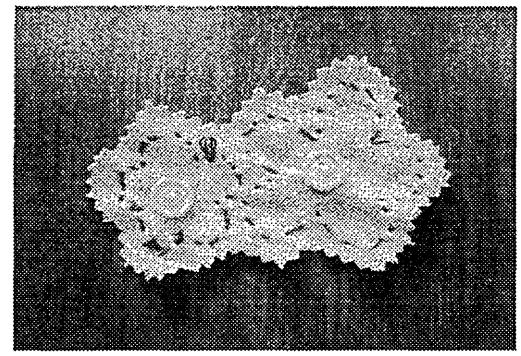
今回は，高校生の学習の様子です。2校時から4校時までの(10:00~12:20)連続した時間帯に，調理や被服，家庭工作の学習をしています。その中で，高等部2年生が，12月から3月までの期間に取り組んでいる被服の学習について，担当の先生が出している「さしこ通信」や取り組みの様子(写真)をお伝えします。

さしこ通信　No.1より(抜粋)

生活Ⅱの裁縫では，なみ縫い，玉むすび，玉どめ，ボタンつけなど生活の中で役に立つであろう活動に取り組みます。今はウォールポケットにつける飾りを作っています。フェルト布はなみ縫いがしにくいところもありましたが，ひと針ひと針丁寧に縫いました。作った飾りは，はさみで切り抜いて，布用の両面糊テープ(アイロンで接着するもの)でウォールポケットに貼り付けます。

さしこ通信　No.2より(抜粋)

ウォールポケットにアイロン接着剤を使って貼る活動をしました。アイロンは，普段家庭で使用することが少ないせいか，みんな，ちょっとおっかなびっくりという感じでした。スチームにしてアイロンをかけたので，蒸気がボァーと出ると，「大変です!」とちょっとした騒ぎになりました。やけどや火事など安全面から，どうしても「アイロンは・・・」とお考えかもしれませんが，ハンカチなどにアイロンをかけることは経験させたいなと思います。

学校で学んだことが，直接生活に役立たないこともあるでしょう。でも，ボタン付けを学ぶことで，つけてくれる人の大変さを感じて「ボタンをつけてください」と言える人になってほしいと思っています。学校の学習では「どんなことをどのように経験させようとしているのか」が大切だと考えます。

♤♠◇♦♡♥♧♣☆★♤♠◇♦♡♥♧♣☆★♤♠◇♦♡♥♧♣☆★♤♠◇♦♡♥♧♣☆★♤♠◇♦♡♥♧♣☆★♤♠◇♦♡♥♧♣☆★

生活Ⅱで学習しておられる，なみ縫い，玉むすび，玉どめ，ボタンつけは，生涯にわたって着るという行為をサポートしてくれる基礎的な技術です。布やボタン，糸や針などに直接触れて物を作るという学習をとおして，技術と心を磨くことができます。目で針や手指の動きを追いながら，さらに手指を動かすという目と手の協働運動は，手指の巧緻性を高めたり，脳を活性化させてくれます。布を触ると優しい気持ち，あたたかい気持ちになります。作る人と使う人を結んでくれる優しさ(絆)にもなります。（教育学部　赤崎眞弓）

５．「家庭科部会の１年を振り返って」

附属幼稚園　　深堀由比

３月末，年長児の祖母の方から，草餅をいただいた。つきたてのお餅は，柔らかく，ふっくらとしていた。ほおばると「よもぎ」の香りが，口の中に広がる。よもぎは細かく刻んであるが，まだ繊維が残り，その混ざり具合で濃淡がある。「春」そのものをいただいたようで，とても幸せだった。昔は，どの家庭でも草餅を作っていたのだろう。昔と言っても，つい３０年～４０年前のことではないだろうか。柔らかなよもぎの葉を選んで摘み取り，蒸して餅の中につき込む。あんこは小豆から作り，包み込む。この長い工程を子ども達は，どんなに楽しみにして待っていただたろうと想う。私は，草餅を作ったことがないし，作り方も知らない。「草餅を作る」という文化は，私の母から私へとは受け継がれていないのである。夜中に急に草餅を食べたくなったら，コンビニエンスストアに行けばいい。安い商品が簡単に手に入る。壊れたら，また買えばいい。欲しい物は，すぐ手に入る。「作る」必要はないのである。便利になった現代社会を楽しむ一方で，「これでいいのかな？」と不安に似た疑問をささやかに感じていた。

今年度，学部と附属学校園の共同研究「家庭科部会」に参加させていただいたことは，家庭科教育から現代社会生活を捉えた御意見やお考えを伺う機会となった。そこで，時々感じていた疑問は，さらに強くなった。家庭科の授業時数は，削減されている。「針に糸を通す」「人参の皮を包丁で削る」「雑巾を絞る」など生活に必要な技術のレベルが下がっていることが懸念されていた。幼稚園の子どもたちの生活を考えると，「衣服の着脱ができない」「脱いだ服をたためない」「紐を結べない」「袋の中に物が収まるように入れられない」などの姿が見られる。しかし，これらのことは，手順を教えると次第にできるようになる。また，一つ一つのことができるようになると，子どもは自信を持ち，次への挑戦をしようとする。生活が安定し，活気が出てくるのである。これらの技能を高めるためには，家庭と園が連携し繰り返し指導していくことが必要である。しかし，その重要性をなかなか保護者に理解していただけない。なぜならば，現代社会では，その技能を要求される場がないからである。

そこで，生活に必要な技能を身に付けることや，「作る」ことの楽しさや意義を家庭に伝えたいと考え，赤崎教授を中心に各校園が共同して「家庭科だより」を発行することを計画した。幼稚園では，保護者に読んでいただきたいと考えて，毎日の登降園の際に、玄関前の掲示板に展示した。保護者の方々は，掲示板の前に足を止めて読んでくださっていた。現在の園児が，やがて小学校でどのような家庭科の授業を受けるのかについて興味を持たれたであろう。また、昨年の秋に，本園で「保育」の体験学習をした中学生が，幼児に関心を持ち，そのかわいらしさを感じたことが，伝わってきたと思う。養護学校の「家庭科だより」からは，一人一人の子どもがよりよく暮らすことのへの強い願いとそのための細かい配慮を読み取ってくださったと考える。さらに，各「家庭科だより」には，赤崎教授のコメントが記されている。各学校園での実践を通して，日々の生活を丁寧に営むことの大切さや作ることの喜びや意義が伝えられている。今一度，生活を振り返り，何を大切にしていくかという価値観への提案になったのではないかと考える。

最後に，私自身，各学校及び大学等からの視点で，教育を広く捉える機会に恵まれた１年間であったことを感謝している。

学部と4附属学校園の共同研究

家庭科だより

平成１７年　３月　７日
長崎大学教育学部附属幼稚園
担当　　深堀由比

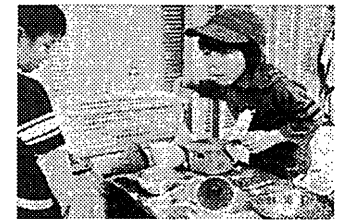
３歳児の衣・食・住

幼児は,「生活力」をどのように獲得しているのでしょうか。子どもたちの生活の中からその姿を御紹介します。

◎衣

「ボタンを留める」ことは，３歳児にとって難しいのです。せっかく全部留めたのに１個ずつ掛け違っていることもしばしばです。裏返しになっている服を元に戻すのは至難の業です。「洋服に手を入れて，つかんでから引っ張ってごらん。」と教えます。服が元に戻ると「できた！」「もうできる！」「〇〇ちゃんは，何でもできる！」と自信満々です。生活には，ある程度の技術が必要です。その技術を教えくれるのは，周りの大人たちです。

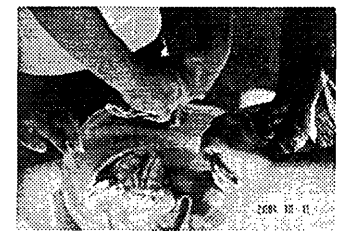
◎食



「とろーりカレーができました。」
「これ，チャーハン！だれか食べませんか？」
「この子，まだ首が据わっていないの。」
子どもたちは，ままごとが大好きです。ままごとコーナーには，本物の鍋やフライパンを置いています。男の子も女の子もエプロンを付けてお料理をしています。赤ちゃんをおんぶしているお母さんもいますし，仕事に出かけるお父さんもいます。家庭での生活を再現して遊んでいます。「危ないから」「邪魔だから」などの理由から，日常生活の中で遠ざけられがちな台所は，子どもたちにとって憧れの場所です。

◎住

砂で汚れた「もものレストラン（泥ままごとができます。）」の掃除をする際には，ほうきとちりとりが大人気です。最初は，ちりとりの中に，なかなか砂が入りませんでしたが，何度も何度も試みていました。子どもたちは，本当に努力家です。



お弁当の前には，台ふきでテーブルをふきます。台ふきを絞る時，お団子のように丸めていました。絞り方を言葉で教えるのは難しいので，手を添えて一緒に絞ってみせます。

遊びや生活の中で子どもたちは,「生活力」を獲得しています。新潟県の地震災害のために，避難生活をされている方へのインタビューがテレビで放送されていました。「心配ばかりしていても前へ進まないから，私は，日々の生活を守っていかなくてはいけない。」と話されていました。普段の生活は日常的に繰り返されているので，生活そのものの意義をなかなか意識しにくい面がありますが，生活が基盤になって人を支えていることを改めて感じました。やがて，子どもたちは大人になり，それぞれの生活を営んでいきます。豊かにたくましく生活して欲しいと願います。手を動かして物を作り，自分の力で生活を築いて欲しいと思います。そのために必要な技術を伝えていきたいと考えています。

「まなぶ」の語源は「まねぶ」‥‥「まねる」だといわれています。子どもはまわりにいる大人たちの言動を「まねる」ことによって「まなぶ」というわけです。

子どもの言動は家庭の中の大人のそれらにとてもよく似ています。モデリングというのですが、園児たちは大人になるためにはどのようにするのかについて、まず家庭において「まねて」、「まなび」、そして幼稚園生活の中で使っています。それぞれの家庭の中で行われていることや、反対に行われていないことが幼稚園の中で表現されているわけです。園児たちの言葉遣い、言葉かけ、イントネーション、行為などに良い意味でも悪い意味でもどきっとさせられることもあります。

園児たちは常に家庭や社会の中で営まれる様々な日常生活を「まねる」て、「まなぶ」ためにじっと見つめています。お父さんやお母さん、先生たちがどんなことをしているかよく見ています。園児たちの言動は大人たちの言動の鏡です。

（教育学部　赤崎眞弓）